



協力・日本ユニセフ協会 タイトルカット・陽魚

鹿児島県の種子島より小さな土地に約220万人が暮らす、世界で最も人口密度の高い場所の一つ、パレスチナのガザ地区。10月7日にイスラエルとの間で大きな衝突が始まってから約1か月で4324人の子供が命を落とし、数千人が負傷しました。壁に囲まれ、「天井のない監獄」とも呼ばれるガザ地区は、イスラエルによって完全に封鎖され、支援物資さえ運び入れることができなくなりました。砲撃によって給水設備や病院、学校なども破壊され、医薬品や水、燃料も尽きかけていました。

かろうじて動いていたガザ地区で最大規模のシファ病院で横たわる11歳(当時)のリアスさんが言いました。「砲撃の瞬間、破片が飛び飛んできました。まわりの人が僕をがれきの下から引っ張り出して、救急車で運んでくれました。足の骨が折れ、頭をケガしました。お母さんも、兄妹も、叔母やいとこたちも、みんな砲撃で死にました。僕だけが生き残りました」。そう話してくれたリアスさんの目はうつろで、子どもらしい光が失われていました。この病院も医薬品が不足し、燃料不足で停電が起きて低体重の赤ちゃんを入れる保育器が使えず、生まれたばかりの赤ちゃんの命さえ守れない状況でした。

ユニセフは、紛争が激化して約1か月の間に、56万人以上の子どもを含む約100万人に給水車で生活用水の供給などをし、19万人以上に医薬品などの物資を届けました。また支援物資を運ぶ安全な道が確保できるよう、すぐに停戦し、ガザで暮らす100万人の子どもの保護を強く呼びかけました。ユニセフの事務局長は「子どもは子ども。どこの国や地域にしようと、常に守られなければなりません。決して攻撃の対象となつてはならないのです」と話しています。



ガザ地区北部のシファ病院で治療を受けるリアスさん(10月28日撮影)

©UNICEF Video 2023



医療機能が完全に壊れたシファ病院から31人の赤ちゃんが助け出され、ガザ地区南部の病院に移されました(11月19日撮影)

©UNICEF/UNI473151/EI Baba

僕だけが生き残りました



くに 国・地域情報

- ・地域名 パレスチナ
- ・面積 6020平方キロメートル(ガザ地区は365平方キロメートル、東エルサレムを含むヨルダン川西岸地区は5855平方キロメートル)
- ・人口 535万4000人(ガザ地区は216万6000人、ヨルダン川西岸地区は318万8000人、いずれも2022年推定)
- ・5歳未満児の死亡率 出生数1000人あたり15人(日本は2人)
- ・青少年(10~19歳)の人口全体に対する割合 22%(日本は9%)

一緒に考える SDGs

今回のアイコンはどれかな？
下に数字と理由も書いてみよう。

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

戦争、災害、貧困……。厳しい環境の中で生きる、世界の子どもたちのいまを知り、私たちに何ができるのか考えるコーナーです。

ユニセフ(国連児童基金)とユニセフ協会(国内委員会)は、すべての子どもの命と権利を守るため、約190の国と地域で活動しています。日本ユニセフ協会は、国内で募金や広報、子どもの権利を守り広める活動などを行っています。



ユニセフハウス 世界の子どもと出会う展示施設(場所：東京都港区)

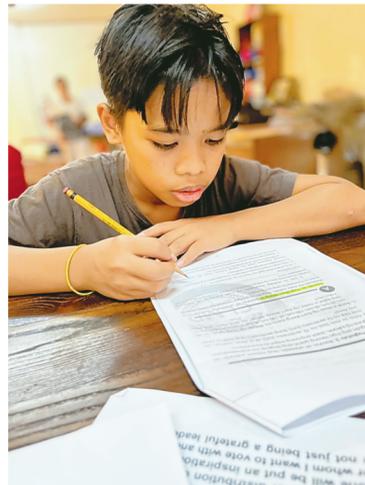


このコーナーは毎月第2、4日曜日(一部地域は毎日)に掲載します。



SDGsなニュースをお届けします。

SDGs NEWS



路上生活から抜け出し、子どもを養育する男の子 アイキャン提供

東南アジアのフィリピンで路上生活を営む子どもたちを支援するNPO法人アイキャン(愛知県名古屋市中区)が、200万円を目標に寄付を呼びかけています。新型コロナウイルス感染症の影響で、フリーレンで子どもたちが生活する施設の運営費が不足しているためです。アイキャンは「子どもたちを路上に戻すことだけは絶対にしたくない」と話しています。

アイキャンは2016年、20人を保護できる平屋約400平方メートルの児童養護施設「子ども家」を首都マニラに近いサンメテオ市に建てました。19年に延べ約670平方メートルの階建てに最大30人を受け入れられるようにしました。現在、11~15歳の18人が路上から抜け出して

路上に子ども戻したくない 愛知のNPO 年越し資金募る

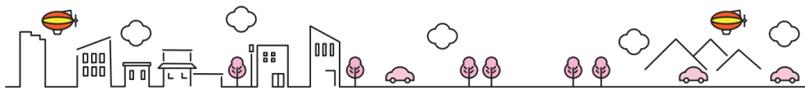
生活しています。食費や教育費、子どもたちの世話をする養母の給料など年間約950万円の運営費がかかります。

アイキャンはフィリピンでステディーツアーを実施し、参加者に貧困問題を学んでもらった路上生活を営む子どもと交流したりする機会を提供してきました。この事業の収入などで施設の運営を支えています。19年度は年間約70人が参加しました。

ところが、コロナ禍でステディーツアーを行えなくなり、アイキャンの事務所を家賃が安い所へ移したり、スタッフの人数を減らしたりして運営費を補っていました。24年3月にはステディーツアーを本格的に再開できそうですが、2月までの運営費が不足しているそうです。アイキャンは「保護している子どもたちを、冷たいコンクリートの上で寝起す路上には絶対に戻したくない。クリスマス、年明けを笑顔で迎えてあげたい」と助けを求めています。

【愛知県基礎】

アイキャンの寄付サイト=QRコードなどで寄付を受け付けています。問い合わせはアイキャン(電話052・253・7299、Eメール info@ican.or.jp)。



つながる なかま

障害のある人の芸術と出会う



障害のある人のアートで街全体を美術館にする「アートパラ深川おしゃべりな芸術祭」が10月14~22日、東京都江東区の深川エリアで開催されました。東京工芸大学デザイン学部の教授の福島治さん(写真)は、この芸術祭の総合プロデューサーを務めています。

福島さんは商業デザインからソーシャル(社会的)デザインへと方向転換する中で、障害のある人の描いたアートに出会い、その魅力とエネルギーに心を動かされました。「共に生きる」社会の実現を目指して、芸術祭を始めたのは2020年。以降、毎年10月に開催し、今年は全国から集まった約500点の絵画などのアート作品が、富岡八幡宮や清澄庭園、商店の店先、歩道上などに展示されました。芸術祭は一部作品の販売もして、障害のあるアーティストの収入支援も目指しています。

この活動はSDGsの目標「すべての人に健康と福祉を」「人や国の不平等をなくそう」の実現につながります。福島さんは「各地で障害のある人のアート展が開催されていますが、一般の方が見に行けない。街なかや店先に作品が展示されることで、アートとの偶然の出会いと驚きが生まれます」と、芸術祭の意義を話します。皆さんも障害のある人のアートを知ってみませんか。(斗ヶ沢秀俊)

元毎日新聞社社長の地球環境部長。毎日メディアカフェで9年間、1000回以上のイベントを行いました。

